（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	田丸　歩実
論文題目	英語におけるメタファー表現の明示性と修辞性：認知言語学・語用論のアプローチ		

（論文内容の要旨）

本論文は、認知言語学の理論的枠組みを用いて、直喩をはじめとした明示性の高いメタファー表現の修辞的機能を明らかにすることを目的とする。メタファー表現の文法的・構文的特徴と語用論的特徴に着目し、テクストデータの量的・質的調査によって実証的な研究を展開している。本論文は全7章で構成されている。なお本論文では、「メタファー」は概念化の次元での現象を指し、その概念化に基づく言語表現を「メタファー表現」と呼ぶ。

第1章では、20世紀以降の主流であるメタファー観を導入したうえで、本論文におけるメタファーの定義と問題の所在を示した。従来の研究では直喩と隠喩が対比的に論じられ、直喩は明示的な比較の形をとるがゆえに隠喩に比べて修辞的に劣るとみなされることが多かった。しかし実際にはメタファーであることを標示する要素を伴う隠喩も存在し、比喩の趣意と媒体、比較の根拠の明示方法もさまざまであることを述べ、メタファーの明示が本当にその力を弱めるのかを疑う必要があることを論じた。

第2章では、メタファーの明示性に関する先行研究の論点を整理した上で、認知文法の概念を援用し「概念的自律性」「プロファイル」「解釈の方向づけ」からメタファーの明示性の再規定を行った。このように複数の次元に分解することによって、明示性の高いメタファー表現には性質の異なるものが混在していること、直喩と隠喩が構文的に連続していることが捉えられる。続く第3章では、プロファイルの観点から隠喩、直喩、メタファー標識の類型化を行った。従来の直喩と隠喩の二分法よりも細かな分類を設け、メタファー表現の形式的・構文的な多様性を捉えるための道具立てとした。

第4章では、実際のテクストでメタファーが果たす修辞的役割を検討するために、異なるテクストタイプにおいて明示性の異なるメタファー表現がどのように使い分けられているかを検証した。事例研究として植物や風景の描写を取り上げ、第3章で示した分類を用いて、科学的描写、広告的描写、詩的描写という3つのテクストタイプにおけるメタファーの構文タイプの分布を調査した。その結果、テクストが書かれた目的に応じて異なる表現が好まれており、その目的の達成のために効果的な形が選択されていることが明

らかになった。科学的描写では慣用的な名詞メタファーが多用され、メタファー的ラベリングによる知識の共有が行われていることが観察された。詩的描写でも同じく名詞メタファーによる指示が行われるが、文脈の中で指示が段階的に確立されるという点で科学的描写とは対照的であった。このようにテクストタイプ間で分布の違いがあることは、明示性の高いメタファー表現が当該の文脈において独自の修辞的機能をもつことを示唆する。

第5章では、明示性の高いメタファー表現の一例として、メタファー標識である *metaphorical(-ly)* の機能を記述・考察した。一般的に標識は解釈の曖昧性を軽減し聞き手の理解を助ける機能があると想定されるため、字義的解釈も同時に可能な構文タイプの方が標識を伴いやすいという仮説を立て、BNCコーパスから収集した用例をもとにこの仮説を量的に実証した。同時に例外的なふるまいを見せる用例を中心に、前後の文脈を参照した質的な分析も行った。その結果、メタファー標識が用いられる構文タイプによってその機能にも相違が見られ、字義的意味の活性化や比喩の強調、トピックの活性化、認識の相対化など、聞き手の理解を助けるにとどまらない豊かな修辞的機能を有することが示された。

第6章では、比較構文の字義的用法との対比によって、直喩の修辞性を考察した。第一に直喩と字義的比較の境界例の分析を行い、比較の修辞性には評価的意味や誇張など複数の要因が関わっていることを示した。第二にas...as構文とlike構文の字義的・修辞的用法の違いを詳細に記述することによって、直喩の修辞的機能がこれらの構文の字義的意味に動機付けられているという先行研究の予測をデータから裏付けた。第三に、similar構文が直喩として用いられにくい事実に注目し、like構文との対比から、修辞的な比較を表すにはトピックの主観的叙述として機能する必要性を指摘した。従来は意外な類似性をもたらすことが直喩の修辞性として捉えられてきたが、比較対象間の概念的な乖離だけでは直喩を特徴づけられないことを明らかにした。

第7章では、全体のまとめを行うとともに、今後の展望と意義を述べた。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、メタファー表現の明示性という側面に着目し、メタファーであることを何らかの言語的標識によって明示することの認知的動機づけと修辞的効果について、深く探求した研究である。

本論文が理論的に依拠する認知言語学では、1980年の概念メタファー理論の提唱以降、それまでは字義的とみなされてきた日常的なメタファー表現の産出基盤が議論の中心となっており、比喩が特殊な修辞技法ではないという点に重きが置かれてきた。こうした動向の陰で、伝統的なレトリック研究で中心をなしてきた修辞性の高いメタファー表現への関心が相対的に希薄化し、直喩など他の隣接する比喩との関連性についても検討が十分にはなされていない。本論文は、このようなメタファー研究の現状に問題提起を行い、標識を伴う明示性の高いメタファー表現に光を当てることによって、メタファーの言語的多様性とそれらの使用の動機づけを明らかにした意欲的な取り組みである。本論文は、主に以下の点において高く評価することができる。

第一に、本論文はメタファー表現の形式面に注目し、文法理論や研究手法を効果的に適用している点が挙げられる。メタファーは意味的現象として一般的には位置づけられるものの、本論文はメタファーとして用いられる語の統語的範疇やメタファー表現の構文パターンといった文法的特性に積極的に着目し、認知文法や構文文法といった文法理論の知見を援用した説明を展開している。また、形式面に着目することでコーパスから当該のメタファー表現を抽出することが可能となり、量的調査による客観的データに基づいた分析を行っている点も評価に値する。

第二に、本論文は上述の理論および手法によってメタファー表現の新たな類型化を行い、メタファーの明示性の尺度を明確化している点が挙げられる。「直喩は標識をもつ A is like B のような比喩、隠喩は標識をもたない A is B のような比喩」という単純な二分化ができないことを指摘し、比喩であることを何らかの方法で標示するメタファーのバリエーションとそれらのもたらす効果を詳細に検討している。隠喩と直喩の関係性だけではなく、第6章で述べられているように、字義的な比較構文と直喩が連続体をなしているという観点も興味深く、二つの事柄の類似性の認識のありかたと言語表現の対応について広範に示唆的な分析が行われている。

第三に特筆すべきであるのは、多様なジャンルから得られた英語の事例の意味をひもとく申請者の解釈力と言語学的な洞察力である。上述のように本論文はコーパスを用いた量的調査を行っているが、抽出した事例がメタファーとしてどのような意味や機能を担っているかを判断するには、当該表現の前後文脈を参照して個別に吟味する必要がある。申請者は個々の事例に丁寧に向き合い、それらの意味や効果を緻密に分

析している。申請者の卓越した観察力は、長きに渡る真摯な取り組みによって培われたものであり、研究に独創性をもたらす資質としてきわめて高く評価することができる。

本論文の課題としては、題目に「語用論のアプローチ」が含まれているものの、実際には語用論的側面の分析が限定的である点が挙げられる。従来の認知意味論より聞き手や読み手の存在を考慮に入れているという点では語用論的ではあるが、談話やテクストに関する理論およびその観点を分析に取り入れる余地が残されている。また、本論文ではメタファー表現の類型化を行うことがひとつの目的となっているが、この類型を具体事例の分析に活用することにより記述的妥当性を高めていくことが今後求められるだろう。これらの点は、申請者の今後の研究の進展において対応が十分に見込まれるものである。

以上、本論文は認知言語学におけるメタファー研究に新たな知見をもたらし、理論的発展にも大きく寄与するものであると言える。加えて本論文は英語の事例を分析対象としていることから、翻訳や教育の分野にも応用が期待される。近年向上が著しい機械翻訳でも、比喩表現、とりわけ広い談話文脈の参照を必要とする表現の解釈はもっとも不得手とするところである。本論文の成果は、人工知能への適用という可能性を孕む一方で、英語の豊かな比喩表現のタイプとそれらの解釈の方法を具体的に示している点で、英語教育にも資するものである。このように、本論文は学際的に貢献をなす意義ある研究であると言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年11月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降